

## 《論評》

## 梵文『金剛針論』を読む

—梵語学習者の為に—

金 沢 篤

## はじめに

サンスクリット文法を学習した者は、進んでサンスクリットのテキストを読むべきだ。文字を学習して積極的にサンスクリットのテキストに挑戦すべきである。文法書は手放しては駄目、辞典は傍にあるだろうか。何を讀もうか。あれこれ聞き耳を立てて、自分の好みとも照らし合わせて、とにかくもテキストを選ぶ。なんとか読むテキストが決まったら、今度はそのテキストを手元に用意しなければならない。おそらく色んな書物が出回っているから、出来ることなら信頼できるテキストがいいが、先ずそれがなかなか簡単ではない。おうおうにして運不運に左右されるが、しかたがない。それでもなんとかテキストを用意できたら、取りかかろう。

ノートなどを用意したい。わたしの場合だと、パソコンだ。パソコンが常にノート代わり。ノートばかりではない。テキストも。出来たらパソコンで使えるテキストも併せて用意したい。書物が画像として出回っているといい。なければ、自分で取り込めばいい。嵩張って重い書物を持ち歩くのは困りものだ。できることなら、文字として処理できる形のテキスト、いわゆる電子テキストもあるといい。自分で初めからノート、いやパソコンに書きつける手間が省けるからだ。サンスクリットのテキストは、多くは古典作品、昔の書物が多いから、著作権などの煩わしいもので保護されなくなっているものが多数。だからインターネットなどで入手できるものもあって有難い。ローマ字などを用いた、必要な作品の電子テキストが入手できれば幸いだ。ついでに、常時用いる各種辞典（今の場合、サンスクリットの辞典）や文法書（サンスクリットの文法書）も。パソコンで使えるものがあればなお有難い。なければ、自分で用意すればいい。わたしの場合は、どちらも用意できている。

とにかく辞典や文法書を用意し、ノートないしパソコンの周りに読むべきテキストがやってきた。もうビシバシ読んでいける。ノートはすべからく読みつ

放しにしないためのものであるばかりか、サンスクリットの学習者にとっては、読むための重要な道具だ。サンスクリットのお好みのテキストを何であれ、苦もなくすらすら読み進めることが出来るようになるのに、どれほどの時間が必要だろうか。わたしの経験で言えば、そんな時は決して訪れないような気がする。その覚悟が必要、腹をくくってかからねばならない。だからこそ、読み進めるためには、ノートが不可欠だと言うのである。そうそう、忘れていた。読もうとするサンスクリットのテキストの翻訳が既に出版されているなら、それもあつた方がよい、のではないか。和訳があれば助かる、英訳しかなければそれでもいい。誰も読んだ形跡のないテキストは初めから避けておいた方が無難である。そこでテキストを読む環境は整った。

テキストを読み始める。第一歩は、韻文と散文からなるテキストを構成するサンスクリット文の同定である。意味伝達の基本単位と言すべき文の特定とその文を構成する諸単語の同定である。この作業はノートもしくはパソコンを使って遂行する。サンスクリットを表示する為の特殊文字付きローマ字を駆使して、展開するのだ。連声部分を解きほぐし、ハイフンを用いて複合語内を分解する。これが済んだら第一歩の完成。次には、文法書や辞典を用いて、文を構成する各支分の意味を明らかにし、きちんと同定する。ここまではがんばりさえすれば大抵の者に可能なステップ。後は運次第、恵まれた者だけが文の意味にありつけるのである。そしてさらに一文一文の意味を辿って行き、しまいにはテキスト全体を読んだことになる。

以下に引くのは、サンスクリットのテキストの一つ、仏教詩人馬鳴アシュヴァゴーシャ *Aśvaghoṣa* の作と伝えられる梵文『金剛針論』の読解作業の軌跡。筆者のパソコンの中に残っている、いわば読書ノートである。これから大いにサンスクリットのテキストを読んでやろうとお考えの梵語学習者に対して、一つのサンプルとして恥を忍んで公表するものである。初学者にとっては長さもほどほどで適当、その内容も。かなり有名なサンスクリットのテキストであり、テキストの出版、翻訳の出版も旧来けっこう盛んで、既にかかなりの数に達している。和訳だけに限定しても、高楠順次郎訳の他、現在では定評ある中村元先生のものなどがある。今更何を、との誹りは免れないだろうが、すべて甘じて受けたい。テキストは中村訳と同じ、編者自身による英訳・註付きの *Sujitkumar Mukhopadhyaya* によるものを用いている。5年ほど前大学院の授

業の為に用意したものだが、むろん中村先生の和訳を常に傍らにおいての作業であった。元々のテキストはデーヴァナーガリー文字で印刷されているが、テキストを所持しない学習者の便宜を慮って、筆者自身の読解の第一歩、特殊記号を含むローマ字による、ハイフニングを済ましたものを、ゴチック体で出している。梵文『金剛針論』をめぐっては、中村元先生による日本語による解説（中村 [1966]426-429 頁）が手軽で有益であろう。

### 梵文『金剛針論』の同定と和訳

Vs: Vajrasūcī → *The Vajrasūcī of Āśvaghoṣa: A Study of the Sanskrit Text and Chinese Version by Sujitkumar Mukhopadhyaya, with Introduction, English Translation and Notes*, Visvabharati: Santiniketan, 1960r.

中村元 [1966] : 中村元訳「金剛の針」『仏典 I』（筑摩書房）339-347 頁（解題：426-429 頁）

<p.1>

#### vajrasūcī

『金剛針論』 (vajrasūcī)

#### oṃ namo mañjunāthāya /

オーム。文殊師利 [菩薩] (mañjunātha=mañjuśrī:m.sg.dat) に敬礼する (namas)。

#### jagad-guruṃ mañjughoṣaṃ natvā vāk-kāya-cetasā /

aśvaghoṣo vajrasūcīṃ sūtrayāmi yathā-matam //1//

口 (vāc) ・ 身 (kāya) ・ 心 (cetas) によって、世界の師 (jagad-guru) である文殊師利 [菩薩] (mañjughoṣa=mañjuśrī:m.sg.acc) に敬礼した後に (natvā:nam-)、[わたし] 馬鳴 (aśvaghoṣa) が、考えのままに (yathā-matam:adv)、『金剛針論』を経唱する (sūtrayāmi:sūtraya- の P 1sg)。

#### vedāḥ pramāṇaṃ smṛtayaḥ pramāṇaṃ dharmā-ārtha-yuktaṃ vacanaṃ pramāṇaṃ /

yasya pramāṇaṃ na bhavet pramāṇaṃ kas tasya kuryād vacanaṃ pramāṇaṃ //2//

ヴェーダ [聖典] (veda) は量 (pramāṇa) である。聖伝 [書] (smṛti) は量である。法 (dharma) と利 (artha) に適った (yukta) 言葉 (vacana) は量である。その者にとって (yasya)、量が量でないならば、いったい誰が (kas:kim の m.sg.nom)、その者の言葉を量とするであろう (kuryāt:kr- の願望 P 3sg)。

**[A] iha bhavatā yad iṣṭam 'sarva-varṇa-pradhānam brāhmaṇa-varṇa' iti, vayam atra brūmaḥ, ko^ayam brāhmaṇo nāma /**

ここに (iha)、あなた (bhavat) によって「バラモン (brāhmaṇa) という種姓 (varṇa) が、一切の (sarva) 種姓 (varṇa) の根源 (pradhāna) である」と (iti) 認められている (iṣṭa) が、このことに関して (atra)、われわれは (vayam) 言う (brūmas:brū- の P 1pl)。「この (ayam)、バラモン (brāhmaṇa) というのは (nāma) いかなるもの (kas) であるか？

**kiṃ jīvaḥ kiṃ jātiḥ kiṃ śarīraṃ kiṃ jñānaṃ kim ācāraḥ kiṃ karma kiṃ veda iti /**

①生命ジーヴァ (jīva) か、②生まれジャーティ (jāti) か、③身体 (śarīra) か、④知ジュニャーナ (jñāna) か、⑤習慣アーチャーラ (ācāra) か、⑥行為カルマン (karman) か、⑦ヴェーダ (veda) か？」と。

**[B] tatra jīvas tāvad brāhmaṇo na bhavati /**

そのうち (tatra)、先ず (tāvat)、①生命ジーヴァ (jīva) は、バラモン (brāhmaṇa) ではない (na bhavati)。

**kasmād /**

何故か？ (kasmāt)

**vedasya prāmāṇyād /**

ヴェーダ (veda) に量性 (prāmāṇya) があるが故に。

**uktaṃ hi vede :**

なぜなら (hi)、ヴェーダ (veda) に於いて [以下のように] 述べられている (ukta) からである。

**[C] {om sūryaḥ paśur āsīt, somaḥ paśur āsīd, indraḥ paśur āsīt /} paśavo devāḥ / ādyante deva-paśavaḥ / śva-pākā api devā bhavanti /**

「オーム。スールヤ (sūrya) は畜生 (paśu) たりし。ソーマ (soma) は畜生 (paśu) たりし。インドラ (indra) は畜生 (paśu) たりし。」畜生が、神々と [なる。] 初め (ādi)、畜生 (paśu) たりし [者] が、終わり (anta) には、神 (deva) で [ある。] // 畜生の如き神々 (deva-paśu) が、飼育される (ādyante:ad- 食べるの使役 ādayati の受動 A 3pl)。犬の料理者 (śva-pāka) たちもまた (api)、神 (deva) となるのである (bhavanti)。

**[D] ato veda-prāmāṇyān manyāmahe jīvatvād brāhmaṇo na bhavati /**

したがって (atas)、ヴェーダ (veda) に量性 (prāmāṇya=pramāṇatva) があるが故に、われわれは考える (manyāmahe:man- A 1pl)。生命ジーヴァであるが故に、[生命ジーヴァは、] バラモンではない。

**bhārata-prāmāṇyād api /**

『マハーバーラタ』の量性に基づいても。

**uktaṃ hi bhārata:**

なぜなら、『マハーバーラタ』に於いて [以下のように] 述べられているからである。

**sapta vyādha daśārṇeṣu mṛgāḥ kālañjare girau /**

<p.2>

**cakravākāḥ śara-dvīpe haṃsāḥ sarasi mānase //3//**

**te^api jātāḥ kuru-kṣetre brāhmaṇā veda-pāragāḥ //4//**

「ダシャーラナ (daśārṇa) 国に、7人の獵師 (vyādha) が、カーランジャラ (kālañjala) 山 (giri) に、獣ムリガ (mṛga) たちが、シャラ大陸 (śara-dvīpa) に、チャクラヴァーカ [鳥] (cakravāka) たちが、ハンサ [鳥] (haṃsa) たちが、マーナサ (mānasa) 湖 (saras) に [いた]。かれらは (tetad の m.pl.nom) やはり (api)、クルの地 (kuru-kṣetra) に、ヴェーダに通曉せる (veda-pāraga) バラモン (brāhmaṇa) として、生まれた (jāta)。」

**[E] ato bhārata-prāmāṇyād vyādha-mṛga-haṃsa-cakravāka-darśana-sambhavān manyāmahe jīvas tāvad brāhmaṇo na bhavati /**

したがって (atas)、『マハーバーラタ』に量性 (prāmāṇya) があるが故に、獵師 (vyādha)、獣ムリガ (mṛga)、ハンサ鳥 (haṃsa)、チャクラヴァーカ鳥 (cakravāka) を見る (darśana) 可能性 (sambhava) があるので、われわれは、[以

下のように] 考える (manyāmahe)。とにかく (tāvat) 生命ジーヴァ (jīva) は、バラモン (brāhmaṇa) ではない (na bhavati) [、と]。

**mānava-dharma-prāmāṇyād api /**

『マヌ法典』の量性にに基づいても。

**uktaṃ hi mānave dha[r]m[e] :**

なぜなら、『マヌ法典』において、[以下のように] 述べられている (ukta) からである。

**adhītya caturo vedān sāṅga-upāṅgena tattvataḥ /**

**śūdrāt pratigraha-grāhī brāhmaṇo jāyate kharaḥ //5//**

**kharo dvādaśa-janmāni śaṣṭi-janmāni sūkaraḥ /**

**śvānaḥ saptati-janmāni --- ity evaṃ manur abravīt //6//**

[4 ヴェーダ (veda) を、補助学 (aṅga)・副補助学 (upāṅga) とともに、正しく (tattvatas:adv)、学んだ後に (adhītya:adhi-i の絶対詞)、シユードラ (śūdra) から、寄進 (pratigraha) を受ける (grāhin)、バラモン (brāhmaṇa) は、驢馬 (khara) として、生まれる (jāyate:jan- A 3sg)。<5>

12(dvādaśa) の生涯 (janma) にわたって、驢馬 (khara)、60(śaṣṭi) の生涯にわたって、豚 (sūkara)、70(saptati) の生涯にわたって、犬 (śvāna) [となる。] と (iti)、そのように (evam)、マヌ (manu) は語った (abravīt:brū-)。<6>

**[F] ato mānava-dharma-prāmāṇyāj jīvas tāvad brāhmaṇo na bhavati /**

したがって (atas)、『マヌ法典』の量性の故に、とにかく (tāvat) 生命ジーヴァ (jīva) は、バラモン (brāhmaṇa) ではない。

**[G] jātir api brāhmaṇo na bhavati / kasmāt / smṛti-prāmāṇyād / uktaṃ hi smṛtau :**

② 生まれジャーティ (jāti) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa) ではない (na bhavati)。何故か? (kasmāt) 聖伝書スメリティ (smṛti) に量性 (prāmāṇya) があるが故に。なぜなら (hi)、聖伝書 (smṛti) に [以下のように] 述べられている (ukta) からである。

**hastinyām acalo jāta ulūkyāṃ keśapiṅgalaḥ /**

**agastyo^agasti-puṣpāc ca kauśikaḥ kuśa-sambhavaḥ //7//**

[アチャラ [仙] (acala) は雌象 (hastinī:f.sg.loc) において誕生し (jāta:m.sg.nom)、

ケーシャピングアラ [仙] (keśapiṅgala) は雌梟 (ulūkī:f.sg.loc) において、そして、アガスティヤ [仙] (agastyā) は、アガスティ (agasti) の花 (puṣpa) より、カウシカ [仙] (kauśika) は、クシャ [草] (kuśa) より生じた (saṃbhavati)。

**kapilaḥ kapilā-jātaḥ śara-gulmāc ca gautamaḥ /**

**droṇa-ācāryas tu kalaśāt tittiris tittirī-sutaḥ //8//**

カピラ [仙] (kapila) は、褐色の牝牛 (kapilā) [において] 誕生 (jāta) し、ガウタマ [仙] (gautama) は、シャラ草の繁み (śara-gulma) から [誕生した。] 一方 (tu)、ドゥローナ師 (droṇa-ācārya) は、水瓶 (kalaśa) から [誕生し、] ティツティリ [仙] (tittiri:m.sg.nom) は、雌鷓鴣 (tittirī) の息子 (suta) である。

**reṇukā-ajanayad rāmam ṛṣyaśṛṅga-muniṃ mṛgī /**

**kaivartiny ajanayad vyāsam kuśikaṃ ca`eva śūdrīkā //9//**

レーヌカー (reṇukā) が、ラーマ (rāma) を生んだ (ajanayat:jan- の過去 P 3sg)。雌鹿 (mṛgī) が、リシュヤシュリンガ牟尼 (ṛṣyaśṛṅga-muni) を [生んだ。] 漁女 (kaivartini:f.sg.nom) が、ヴィヤーサ [仙] (vyāsa) を生んだ (ajanayat)。同じく (ca`eva)、シュードラ女 (śūdrīkā) が、クシカ [仙] (kuśika) を [生んだ。]

**viśvāmitraṃ ca caṇḍālī vasiṣṭhaṃ ca`eva urvaśī /**

**na teṣāṃ brāhmaṇī mātā loka-ācārāc ca brāhmaṇāḥ //10//**

そして、チャンダーラ女 (caṇḍālī) が、ヴィシュヴァーミトラ [仙] (viśvāmitra) を [生み、] 同じく (ca`eva)、ウルヴァシー (urvaśī) が、ヴァシシュタ [仙] (vasiṣṭha) を [生んだ。] かれらの (teṣāṃ:m.pl.gen) 母 (mātr:f.sg.nom) が、バラモン女 (brāhmaṇī:f.sg.nom) であるということはない (na)、が (ca)、世間の習慣 (loka-ācāra) の故に、[かれらは] バラモン (brāhmaṇa) である。

**[H] ataḥ smṛti-prāmāṇyān manyāmahe jātis tāvad brāhmaṇo na bhavati /**

この故に (atas)、スメリティ聖伝書 (smṛti) の量性 (prāmāṇya) の故に、[われわれは、以下のように] 考える (manyāmahe:man- の現在 A 1pl)。ともかくも (tāvat)、生まれジャーティ (jāti) は、バラモン (brāhmaṇa) ではない (na bhavati)。

**[I] atha manyase mātā vā`abrāhmaṇī bhavet / teṣāṃ pitā brāhmaṇas tato <p.3> brāhmaṇo bhavati`iti /**

あるいは (atha ~ vā)、[あなたは、] 考える (manyase:man- の A 2sg) かも知れない (bhavet:bhū- の願望 P 3sg)、母親 (mātr:f.sg.nom) がバラモンではなく

(abrāhmaṇīf.sg.nom)、そうしたかれらの (teṣām)、父親 (pitṛ:m.sg.nom) がバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) であり、その結果 (tatas)、[その子供が] バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) となった (bhavati) ののである、と (iti)。

**yady evaṃ dāsī-putrā api brāhmaṇa-janitā brāhmaṇā bhaveyuh / na ca^etad bhavatām iṣtam /**

もし (yadi)、そのようなならば (evam)、女奴隷 (dāsī) の息子 (putra:m.pl.nom) たちであろうとも (api)、バラモン [父] (brāhmaṇa) より生まれた (janita:m.pl.nom) ならば、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) となるであろう (bhaveyus:bhū- の願望 P 3pl)。だが (ca)、そのことは (etad:nt.sg.nom)、あなた (bhavat:m.pl.gen) がたにとって、認められる (iṣṭa:nt.sg.nom) ということがない (na) のである。

**[J] kiṃ ca / yadi brāhmaṇa-putro brāhmaṇas tarhi brāhmaṇa-abhāvaḥ prāpnoti /**  
さらにまた (kiṃ ca)、もし (yadi)、バラモン [父] (brāhmaṇa) の息子 (putra:m.sg.nom) が、バラモン (brāhmaṇa) であるならば、その時には (tarhi)、バラモン (brāhmaṇa) がいなくなるということ (abhāva:m.sg.nom) が、出来る (prāpnoti:pra-āp- の P 3sg) のである。

**idānīn taneṣu brāhmaṇeṣu pitari sandehād /**

今は (idānīm:adv)、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.loc) という子孫 (tana:m.pl.loc) たちにおける、父 (pitṛ:m.sg.loc) に関する、疑惑 (sandeha:m.sg.abl) があるが故に。

**gotra-brāhmaṇam ārabhya brāhmaṇīnām sūdra-abhigamana-darśanād /**

種姓 (gotra) たるバラモン (brāhmaṇa:m.sg.acc) を、目指して (ārabhya:ā-rabh- の絶対詞)、バラモン女 (brāhmaṇīf.pl.gen) たちが、シュードラ (śudra) と交接 [することが] (abhigamana) 見られる (darśana) が故に。

**ato jātir brāhmaṇo na bhavati /**

この故に (atas)、ジャーティ生まれ (jāti:f.sg.nom) が、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) ではないのである (na bhavati)。



**mānava-dharma-prāmāṇyād api / uktaṃ hi mānave dharme :**

『マヌ法典』(mānava-dharma)の量性(prāmāṇya:nt.sg.abl)に基づいても(api)、[そのことが妥当する]。なぜならば(hi)、『マヌ法典』(mānave dharme)には、[以下のように]述べられている(ukta:vac-)からである。

**sadyaḥ patati māṃsena lākṣayā lavaṇena ca /**

**try-ahāc chūdraś ca bhavati brāhmaṇaḥ kṣīra-vikrayī //11//**

**ākāśa-gāmino viprāḥ patanti māṃsa-bhakṣaṇāt /**

**viprāṇaṃ patanaṃ dr̥ṣṭvā tato māṃsāni varjayet //12//**

肉(māṃsa:nt.sg.instr)、赤染料(lākṣā:f.sg.instr)、および塩(lavaṇa:nt.sg.instr)によって、[バラモンは、]直ちに(sadyas:adv)、落ちる(patati:pat- P 3sg)。また(ca)、乳(kṣīra)を売る(vikrayin:vi-kri-m.sg.nom)バラモン(brāhmaṇa:m.sg.nom)は、3日にして(try-ahāt:try-aha:m.sg.abl:adv)、シュードラ(śūdra:m.sg.nom)となる(bhavati)。虚空を行ける(ākāśa-gāmin:m.pl.nom)バラモン(vipra:m.pl.nom)たちは、肉食(māṃsa-bhakṣaṇa:nt.sg.abl)に基づいて、落ちる(patanti:pat- P 3pl)。バラモン(vipra:m.pl.gen)たちの落下(patana:nt.sg.acc)を、見た後に(dr̥ṣṭvā)、それ故に(tatas)、諸々の肉(māṃsa:nt.pl.acc)を、[人は、]避けるべし(vrajayet:vraj- 使役願望 P 3sg)。

**[K] ato mānava-dharma-prāmāṇyāj jātis tāvad brāhmaṇo na bhavati /**

したがって(atas)、『マヌ法典』(mānava-dharma)に量性(prāmāṇya)あるが故に、ともかくも(tāvat)、ジャーティ生まれ(jāti)は、バラモン(brāhmaṇa)ではない(na bhavati)。

**yadi hi jātir brāhmaṇaḥ syāt, tadā patane śūdra-bhāvo na^upapadyate /**

なぜならば(hi)、もし(yadi)ジャーティ生まれ(jāti:f.sg.nom)が、バラモン(brāhmaṇa:m.sg.nom)ならば、その時には(tadā)、落下(patana:nt.sg.loc)がある時に、シュードラ(śūdra)となること(bhāva:m.sg.nom)が、成立しない(na^upapadyate:upa-pad- の A 3sg)のである。

**kiṃ khalu duṣṭo^apy aśvaḥ sūkaro bhavet / tasmāj jātir api brāhmaṇo na bhavati /**

実に (khalu)、何故に (kim)、汚れた (duṣṭa:m.sg.nom) とはいえ (api)、馬 (aśva:m.sg.nom) が、豚 (sūkara:m.sg.nom) になるであろう (bhavet:bhū- 願望 P 3sg)。それ故に (tasmāt)、ジャーティ生まれ (jāti:f.sg.nom) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) ではない (na bhavati)。

**[L] śārīram api brāhmaṇo na bhavati /**

③ 身体 (śārīra:nt.sg.nom) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) ではない (na bhavati)。

**kasmād /**

何故か? (kasmāt)

**yadi śārīraṃ brāhmaṇaḥ syāt tarhi pāvako`api brahma-hā syād /**

もし (yadi)、身体 (śārīra:nt.sg.nom) が、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) ならば (syāt:as- 願望 P 3sg)、その時には (tarhi)、火 (pāvaka:m.sg.nom) もまた (api)、バラモン殺し (brāhmaṇa-han:m.sg.nom) であろう (syāt:as- 願望 P 3sg)。

**brahma-hatyā ca bandhūnām śārīra-dahanād bhaved /**

そして (ca)、親族 (bandhum.pl.gen) たちには、[死者の] 身体 (śārīra) を焼くこと (dahanant.sg.abl) があるが故に、バラモン殺し (brāhmaṇa-hatyā:f.sg.nom) が、あるであろう (bhavet:bhū- P 3sg)。

**brāhmaṇa-śārīra-nisyanda-jātās ca kṣatriya-vaiśya-sūdrā api brāhmaṇaḥ syuḥ /**

また (ca)、バラモン (brāhmaṇa) の身体 (śārīra) の流出液 (nisyanda) より生じた (jāta:m.pl.nom)、クシャトリア (kṣatriya) ・ヴァイシュヤ (vaiśya) ・シュードラ (śūdra:mpl.nom) たちもまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) であろう (syus:as- P 3pl)。

**na ca`etad dṛṣṭam /**

だが (ca)、そのことが (etad) 認知されている (dṛṣṭa:nt.sg.nom) という事はない (na) のである。

**brāhmaṇa-śārīra-vināśāc ca yajana-yājana-adhyayana-adhyāpana-dāna-parigrāha-ādīnām brāhmaṇa-śārīra-janītānām phalasya vināśaḥ syāt /**

また (ca)、バラモン (brāhmaṇa) の身体 (śārīra) の滅 (vināśa:m.sg.abl) に基づいて、バラモン (brāhmaṇa) の身体 (śārīra) より生ぜしめられた (janita:m.pl.gen)、祭祀 (yajana) ・犠牲 (yājana) ・読誦 (adhyayana) ・教誦 (adhyāpana) ・布施 (dāna) ・受施 (parigrāha) 等 (ādīm.pl.gen) の、果報 (phalant.sg.gen) の、滅 (vināśa:m.sg.nom) が

あるであろう (syāt:as- の願望 P 3sg)。

**na ca<sup>h</sup>etad iṣṭam / ato manyāmahe śarīram api brāhmaṇo na bhavati /**  
<p.4>

だが (ca)、そのことが (etad:nt.sg.nom)、認められている (iṣṭa:nt.sg.nom) ということはない (na) のである。したがって (atas)、[われわれは] 考える (manyāmahe-man- A 1pl)、身体 (śarīram.sg.nom) もまた (api) バラモン (brāhmaṇa) ではない (na bhavati)。

**[M] jñānam api brāhmaṇo na bhavati / kutaḥ / jñāna-bāhulyād /**

④ ジュニャーナ知 (jñāna) もまた (api) バラモン (brāhmaṇa) ではない (na bhavati)。何故か? (kutas) 知 (jñāna) の多数性 (bāhulya) の故に。

**ye ye jñānavantaḥ śūdrās te sarva eva brāhmaṇāḥ syuḥ /**

いかなるシュードラであれ、知を有するならば、それらの者たちは、悉く皆、バラモンであろう。

**dr̥śyante ca kva cit śūdrā api veda-vyākaraṇa-mīmāṃsā-sāṃkhya-vaiśeṣika-nagna-ājivaka-ādi-sarva-śāstra-artha-vidāḥ /**

そして (ca)、時に (kva cit)、シュードラ (śūdra:m.pl.nom) であろうとも (api)、ヴェーダ (veda)・文法学 (vyākaraṇa)・ミーマーンサー (mīmāṃsā)・サーンキヤ (sāṃkhya)・ヴァイシェーシカ (vaiśeṣika)・ナグナ (裸形派) (nagna)・アージーヴァカ (ājivaka) 等 (ādi) の教典 (śāstra) の意味 (artha) を知悉している (-vid:m.pl.nom) のが、知られる (dr̥śyante:dr̥ś- の受動 A 3pl) のである。

**na ca te brāhmaṇāḥ syuḥ / ato manyāmahe jñānam api brāhmaṇo na bhavati /**

だが (ca)、かれらが (te:m.pl.nom)、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) であろう (syus:as- の願望 P 3pl) ことはない (na) のである。この故に、[われわれは、以下のように] 考える、知もまたバラモンではない。

**[N] ācāro<sup>h</sup>api brāhmaṇo na bhavati / kutaḥ / yady ācāro brāhmaṇāḥ syāt tadā ye ya ācāravantaḥ śūdrās te sarve brāhmaṇāḥ syuḥ /**

⑤ アーチャーラ習慣 (ācāra:m.sg.nom) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) ではない (na bhavati)。何故か? (kutas) もし (yadi) 習慣 (ācāra:m.sg.nom) がバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) である (syāt:as- 願望 P 3sg) ならば、その時には (tadā)、いかなる (ye ye:m.pl.nom) シュードラ (śūdra:m.pl.nom) であ

れ、習慣を有する (ācāravat:m.pl.nom) ならば、それらの者は (te:m.pl.nom) 皆 (sarva:m.pl.nom)、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) であろう (syus:as- 願望 P 3pl)。  
**dr̥śyante ca naṭa-bhaṭa-kaivarta-bhaṇḍa-prabhṛtayaḥ pracaṇḍatara-vividha-ācāravanto, na ca te brāhmaṇā bhavanti / tasmād ācāro<sup>h</sup>api brāhmaṇa na bhavati /**

そして (ca)、俳優 (naṭa)・傭兵 (bhaṭa)・漁師 (kaivarta)・道化師 (bhaṇḍa) 等が、とてつもないような (pracaṇḍatara) 種々の (vividha) 習慣を有する者 (ācāravat:m.pl.nom) であることが、知られる (dr̥śyante:dr̥ś- の受動 A 3pl)。だが (ca)、かれらが (te:m.pl.nom)、バラモン (brāhmaṇa) である (bhavanti:bhu= の P 3pl) というのではない (na) のである。それ故に (tasmāt)、習慣 (ācāra) もまた (api) バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) ではない (na bhavati) のである。

**[O] karma<sup>h</sup>api brāhmaṇa na bhavati / kutaḥ / dr̥śyante hi kṣatriya-vaiśya-śūdrā yajana-yājana- adhyayana-adhyāpana-dāna-pratigraha-prasaṅga-vividhāni karmāni kurvanto, na ca te brāhmaṇā bhavatām sammatāḥ / tasmāt karma<sup>h</sup>api brāhmaṇa na bhavati /**

⑥ カルマン行為 (karman:nt.sg.nom) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) ではない (na bhavati)。何故か? (kutaḥ) なぜならば (hi)、クシャトリア (kṣatriya)・ヴァイシユヤ (vaiśya)・シュードラ (śūdra:m.pl.nom) たちが、祭祀 (yajana)・犠牲 (yājana)・読誦 (adhyayana)・教誦 (adhyāpana)・布施 (dāna)・受施 (parigraha)・嗜好 (prasaṅga) によって種々である (vividha:nt.pl.acc)、諸々の行為 (karman:nt.pl.acc) を、為しつつある (kurvat:kṛ- の現在分詞 m.pl.nom) ことが、知られる (dr̥śyante:dr̥ś- の受動 A 3pl)。だが (ca)、かれらが (te:m.pl.nom)、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) であると、あなた (bhavat:m.pl.gen) がたにとって、考えられる (saṃmata:saṃ-man- の過去分詞 m.pl.nom) というのではない (na) のである。それ故に (tasmāt)、カルマン行為 (karman:nt.sg.nom) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) でない (na bhavati) のである。

**[P] vedena<sup>h</sup>api brāhmaṇa na bhavati / kasmād /**

⑦ ヴェーダ (veda:m.sg.instr) によってもまた (api)、バラモンなのではない。何故か?

**rāvaṇo nāma rākṣaso<sup>h</sup>abhūt / tena<sup>h</sup>adhītās catvāro vedāḥ / ṛgvedo yajurvedaḥ**

sāmavedo<sup>^</sup>atharvavedaś ca<sup>^</sup>iti / rākṣasānām api gṛhe gṛhe veda-vyavahārah  
pravartata eva / na ca te brāhmaṇāḥ syuḥ / ato manyāmahe vedena<sup>^</sup>api  
brāhmaṇo na bhavati<sup>^</sup>iti /

[昔] ラーヴァナ (rāvaṇa:m.sg.nom) という名前の (nāma:adv) 羅刹 (rākṣasa:m.sg.nom) が、いた (abhūt:bhū- の語根アオリスト P 3sg)。その [羅刹] によって (tena)、『リグ・ヴェーダ』 (ṛgveda)、『ヤジュル・ヴェーダ』 (yajurveda)、『サーマ・ヴェーダ』 (sāmaveda)、『アタルヴァ・ヴェーダ』 (atharvaveda) という (iti)、四つ (catuḥ:m.pl.nom) の諸ヴェーダ (veda:m.pl.nom) が読誦された (adhita:adhi-i- の過去分詞 m.pl.nom)。[したがって、] 羅刹 (rākṣasa:m.pl.gen) たちにとってもやはり (api)、家々では (gṛhe gṛhe:nt.sg.loc)、ヴェーダ [による日常言語] 活動 (veda-vyavahāra:m.sg.nom) が、まさしく (eva) 行われている (pravartate:pravr̥t- の A 3sg) のである。だが (ca)、その [羅刹たち] が (te:m.pl.nom)、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) であるだろう (syus:as- の願望 P 3pl)、ということはない (na) のである。この故に (atas)、[われわれは、以下のように] 考える (manyāmahe:man- の A 1pl)、ヴェーダ (veda:m.sg.instr) によってもまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) なのではない (na bhavati)、と (iti)。

[Q] katham tarhi brāhmaṇatvaṃ bhavati / ucyate :

ならば (tarhi)、いかにして (katham)、バラモン性 / バラモンたること (brāhmaṇatva:nt.sg.nom) がある (bhavati) のか? [と言うならば、以下のように] 答えられる (ucyate:vac- の受動 A 3sg)。

brāhmaṇatvaṃ na śāstreṇa na saṃskārair na jātibhiḥ /  
na kulena na vedena na karmaṇā bhavet tataḥ //13//

バラモン性 / バラモンたること (brāhmaṇatva:nt.sg.nom) は、教典 (śastra:nt.sg.instr) によってでも、諸々の浄化式 (saṃskāra:m.pl.instr) によってでも、諸々のジャーティ生まれ (jāti:f.pl.instr) によってでも、クラ家柄 (kula:m.sg.instr) によってでも、ヴェーダ (veda:m.sg.instr) によってでも、カルマン行為 (karman:nt.sg.instr) によってでも、あるだろう (bhavet:bhū- の願望 P 3sg)、ということはない (na) のである、つまるところ (tatas)。

[R] kunda-indu-dhavalam hi brāhmaṇatvaṃ nāma sarva-pāpasya<sup>^</sup>apākaraṇam iti /  
<p.5>

なぜならば (hi)、バラモン性／バラモンたること (brāhmaṇatva:nt.sg.nom) とは (nāma:adv)、ジャスミン (kunda)・月 (indu) [の如く] 白きもの (dhavalant.sg.nom) であり、一切の (sarva) 悪障 (pāpa:nt.sg.gen) を駆逐するもの (apākaraṇa:nt.sg.nom) であるからである。と (iti)。

[S] uktaṃ hi / vrata-tapo-niyama-upavāsa-dāna-dama-śama-saṃyama-upacārāc ca /  
なぜなら (hi)、[以下のように] 述べられている (ukta) からである。「そして、誓戒 (vrata)・苦行 (tapas)・勸戒 (niyama)・齋戒 (upavāsa)・布施 (dāna)・自制 (dama)・止息 (śama)・禁戒 (saṃyama)・礼儀 (upacāra) に基づいて。」

tathā ca uktaṃ vede :

また (ca)、同様に (tathā)、ヴェーダ [聖典] (veda:m.sg.loc) に於いて、述べられている (ukta) のである。

nirmamo nirahaṅkāro niḥsaṅgo niṣparigrahaḥ /

rāga-dveṣa-vinirmuktas taṃ devā brāhmaṇaṃ viduḥ //14//

「わがものとの思いなく (nirmama:m.sg.nom)、われとの思いなく (nirahaṅkāra:m.sg.nom)、無執着にして (niḥsaṅga:m.sg.nom)、無受施にして (niṣparigraha:m.sg.nom)、愛 (貪 rāga)・憎 (瞋 dveṣa) から解放されたる (vinirmukta:m.sg.nom)、かの者を (tam:m.sg.acc)、神々 (deva:m.pl.nom) は、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) であると、知れり (vidus:vid- の完了 P 3pl)。」

sarva-sāstre apy uktaṃ :

一切の教典に於いてもまた、述べられているのである。

satyaṃ brahma tapo brahma brahma ca indriya-nigrahaḥ /

sarva-bhūte dayā brahma etad brāhmaṇa-lakṣaṇam //15//

「ブラフマン (brahman) は真実 (satya) である、ブラフマンは苦行 (tapas) である、そしてブラフマンは感官 (indriya) の抑制 (nigraha:m.sg.nom) である、ブラフマンは一切生類 (sarva-bhūta:m/n.sg.loc) に対する憐憫 (dayā:f.sg.nom) である、これが (etat)、バラモン (brāhmaṇa) の特相 (lakṣaṇa:nt.sg.nom) である。

satyaṃ na asti tapo na asti na asti ca indriya-nigrahaḥ /

sarva-bhūte dayā na asti etac cāṇḍāla-lakṣaṇam //16//

真実が存在しない、苦行が存在しない、そして感官の抑制が存在しない、一切の生類に対する憐憫 (dayā) が存在しない、これが、チャンドーラの特相である。

**deva-mānuṣa-nārīṇāṃ tiryagyoni-gateṣv api /**

**maithunaṃ na^adhigacchanti te viprās te ca brāhmaṇāḥ // iti //17//**

神々 (deva) や、男 (mānuṣa) や、女 (nārī:f.pl.gen) であれ、[また、] 仮に、畜生の生まれ (tiryag-yoni) に到った (gata:m.pl.loc) としても (api)、性交 (maithuna:t.sg.acc) に、赴かない (na^adhigacchanti:adhi-gam- の P 3pl)、[そうした] かれ等は (te:tad の m.pl.nom)、賢者 (vipra:m.pl.nom) である、そして (ca)、かれ等が (te:tad の m.pl.nom)、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) である。」と。

**śukreṇa^apy uktam :**

シユクラ [仙] (śukra:m.sg.instr) によってもまた (api) 述べられている (uktam)。

**na jātir dṛśyate tāvad guṇāḥ kalyāṇa-kāraṅgāḥ /**

**caṇḍālo^api hi tatra-sthas taṃ devā brāhmaṇaṃ viduḥ //18//**

「とにかく (tāvat)、善 (kalyāṇa) を産み出すもの (kāraṅga:m.pl.nom) は、諸々の美德 (guṇa:m.pl.nom) であって、ジャーティ生まれ (jāti:f.sg.nom) ではない (na)、ということが、知られている (dṛśyate:dṛś- の受動 A 3sg)。実に (hi)、チャンドーラ (caṇḍāla:m.sg.nom) であろうとも (api)、その [善] に住する (tatra-stha:m.sg.nom) ならば、神々 (deva:m.pl.nom) は、かの者を (taṃ:m.sg.acc)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.acc) であると知れり (viduḥ:vid- の完了 P 3pl)。」

**[T] tasmān na jātir na jīvo na śarīraṃ na jñānaṃ na^ācāro na karma na vedo brāhmaṇa iti /**

それ故に (tasmāt)、②ジャーティ生まれ (jāti) も、①ジーヴァ生命 (jīva) も、③身体 (śarīra) も、④ジュニャーナ知 (jñāna) も、⑤アーチャーラ習慣 (ācāra) も、⑥カルマン行為 (karman) も、⑦ヴェーダ (veda) もバラモン (brāhmaṇa) であるということはない (na) のである、と (iti)。

**[U] anyac ca bhavatā^uktam / {iha sūdrāṇāṃ pravrajyā na vidhīyate / brāhmaṇa-śūsṛūṣā^eva teṣāṃ dharmo vidhīyate / caturṣu varṇeṣv ante**

**vacanāt te nīcā} iti/**

また (ca)、あなた (bhavat:m.sg.instr) によって、別のこと (anyat:nt.sg.nom) が、述べられている (uktant.sg.nom)。「この世に於いては (iha)、シュードラ (śūdra:m.pl.gen) たちに対して、出家 (pravrajyā:f.sg.nom) は命じられていない (na vidhīyate:vi-dhā- の受動 A 3sg)。バラモン (brāhmaṇa) への随順 (śuśrūṣā:f.sg.nom) だけ (eva) が、かれらに対しては (teṣām)、ダルマ (dharma:m.sg.nom) として命じられている (vidhīyate)。四つの (catuṛ:m.pl.loc) ヴァルナ (varṇa:m.pl.loc) のうちの、最後に (ante:anta の sg.loc :adv)、言及 (vacana:nt.sg.abl) があるが故に、かれらは (te:m.pl.nom)、卑賤なので (nīca:m.pl.nom) ある。」と (iti)。

**[V] yady evam indro^api nīcaḥ syāt /**

もし (yadi) そのようである (evam) ならば、インドラ (indra:m.sg.nom) もまた (api)、卑賤である (nīca:m.sg.nom) ことになろう (syāt:as- の願望 P 3sg)。

**{śva-yuva-maghaṇām ataddhite}(Paṇiṇiṣūtra VI -4-133) iti sūtra-vacanāt /**

「[犬 (śvan)]・[若者 (yuvan)]・[インドラ (maghavan)] の、[v は母音化する、] タッディタ接尾辞の前を除いて (ataddhite) (『パーニニ・スートラ』 VI 4-133) というスートラ (sūtra) の言葉 (vacana) があるが故に。

**śvā iti kukkuraḥ / yuvā iti puruṣaḥ / maghavā iti surendraḥ /**

「śvan (犬)」というのは、犬 (kukkura:m.sg.nom) である。「yuvan (若者)」というのは、男 (puruṣa:m.sg.nom) である。「maghavan (インドラ)」というのは、インドラ神 (surendra:m.sg.nom) である。

**tayoḥ śva-puruṣayor indra eva nīcaḥ syāt /**

「最後に列せられているのだから、」 その、「犬 (śvan)」「若者 (yuvan)」の両者より、他ならぬ (eva) インドラ (indra:m.sg.nom) が、卑賤である (nīca:m.sg.nom) ということになるであろう (syāt)。

**na ca^etad dr̥ṣṭam / kiṃ hi vacana-mātreṇa doṣo bhavati / tathā ca / umā-maheśvarau / danta-oṣṭham ity api loke prayujyate /**

だが (ca)、そのことが (etad) 知られている (dr̥ṣṭant.sg.nom) という事はない (na) のである。実に (hi)、単に [順序を持った] 言葉があるというだけで、どうして (kiṃ) 過失 (doṣa:m.sg.nom) が生じる (bhavati) であろうか？ また (ca)、同じように (tathā)、「ウマー女神 (umā)・マヘーシュヴァラ神 (maheśvara) の両



者が (m.dual.nom)]・「歯 (danta)・唇 (oṣṭha) の両者が (nt.sg.nom)」というふう  
に (iti) も (api)、世間 (loka:m.sg.loc) に於いては、適用される (prayujyate:pra-yuj-  
受動 A 3sg) のである。

<p.6>

**na ca dantāḥ prāg-utpannā umā vā /**

そして (ca)、諸歯 (danta:m.pl.nom) や、ウマー女神 (umā:f.sg.nom) が、[唇や、  
マハーシュヴァラ神の、] 先に (prāk) 生起したもの (utpanna:m.pl.nom) である  
ということはない (na) のである。

**kevalam varṇa-samāsa-mātraṃ kriyate / brahma-kṣatra-viṭ-śūdrā iti / tasmād  
yā bhavadīya-pratijñā {brāhmaṇa-śūsṛṣā^eva teṣāṃ dharmo}, [sā] na bhavati /**  
単に (kevalam:adv)、単なる (mātra) ヴァルナ／字音 (varṇa) の複合語／集合  
(samāsa) が、現じられている (kriyate) のである、「バラモン (brahman)・ク  
シャトリヤ (kṣatra)・ヴァイシユヤ (viś)・シユードラ (śūdra:m.pl.nom) たち  
が、」というの (iti)。それ故に、「バラモン (brāhmaṇa) への随順 (śūsṛṣā :f.  
sg.nom) だけ (eva) が、かれらに対しては (teṣāṃ)、ダルマ (dharma:m.sg.nom)  
として [命じられている (vidhīyate)。]」 ([U] を参照！) [との] あなたがたの  
(bhavadiya) 主張 (pratijñā:f.sg.nom) が [なされたが、] その [主張] は (sā)、  
[妥当では] ないのである (na bhavati)。

**[W] kiṃ ca^aniścito^ayam brāhmaṇa-prasaṅgaḥ / uktaṃ hi mānave dharme :**  
さらにまた (kiṃ ca)、この (ayam)、「バラモン (brāhmaṇa)」 [という言葉] の  
適用 (prasaṅga:m.sg.nom) は、不確定である (aniścita:m.sg.nom)。なぜならば  
(hi)、『マヌ法典』 (mānave dharme) において、[以下のように] 述べられてい  
る (ukta:nt.sg.nom) からである。

**vṛṣalī-phena-pītasya niḥśvāsa-upahatasya ca /**

**tatra^eva ca prasūtasya niṣkṛtir na^upalabhyate //19//**

**[[[vṛṣalī-phena-pītasya niḥśvāsa-upahatasya ca /**

**tasyaṃ ca^eva prasūtasya niṣkṛtir na vidhīyate //(Ms III -19)]]]**

**śūdrī-hastena yo bhukte māsam ekaṃ nirantaram /**

**jīvamāno bhavec chūdro mṛtaḥ śvā naś ca jāyate //20//**

**śūdrī-parivṛto vipraḥ śūdrī ca gṛha-medhini /**

**varjitaḥ pitṛ-devena rauravaṃ so<sup>^</sup>adhigacchati //21//**

「シュードラ女 (vr̥ṣali) の唾液 (phena) を飲んだ者 (pīta:pā- の過去分詞 m.sg.gen)、及び (ca)、呼気 (niḥśvāsa) によって損なわれた者 (upahata:m.sg.gen)、及び (ca)、まさしく (eva) その [シュードラ女] において (tatra)、誕生した者 (prasūta:prasū- の過去分詞 m.sg.gen) には、贖罪 (niṣkṛti:f.sg.nom) は、認められない (na<sup>^</sup>upalabhyate:upa-lab- 受動 A 3sg)。<19>

シュードラ女 (śūdrī) の手 (hasta:nt.sg.instr) によって、一ヶ月の間 (māsam ekam:adv)、食事をせる (bhunkte:bhuj- の A 3pl) ところの、その者は (yas ~ [so] ~)、直ちに (nirantaram:adv)、生きながら (jīvamāna:jīv- の現在分詞 m.sg.nom) にして、シュードラ (śūdra:m.sg.nom) となるであろう (bhavet)。そして、死んだ (mr̥ta:m.sg.nom) ならば、われわれにとっては (nas:lpl.gen)、犬 (śvan:m.sg.nom → śvā//śvānas は pl.nom) として誕生する (jāyate:jan- の A 3sg)。<20> バラモン (vipra:m.sg.nom) が、シュードラ女 (śūdrī) に囲まれて (parivṛta:m.sg.nom)、また (ca)、シュードラ女 (śūdrī:f.sg.nom) が、家庭祭施行者 (gṛhamedhin: 女性語尾 ī をとる f.sg.nom) である。[そのような] その者は (som.sg.nom)、父祖・神 (pitṛ-deva: 並列 nt.sg.instr) によって、捨離されて (varjita:vr̥j- 使役過去分詞 m.sg.nom)、叫喚地獄 (raurava :m.sg.acc) に、赴く (adhigacchati)。<21>」

**[X] ato<sup>^</sup>asya vacanasya prāmāṇyād aniyato<sup>^</sup>ayaṃ brāhmaṇa-prasaṅgaḥ /**

これ故に (atas)、この (asya)、言葉 (vacana:nt.sg.gen) に、量性 (prāmāṇya:nt.sg.abl) が存するが故に、この (ayaṃ)、「バラモン (brāhmaṇa)」[という言葉] の適用 (prasaṅga:m.sg.nom) は、必然的ではない (aniyata:m.sg.nom) のである。

**[Y] kiṃ ca<sup>^</sup>anyat /**

さらにまた (kiṃ ca)、別の [言葉 / 事情 / 事態 / 問題? がある。] (anya:nt.sg.nom)

**śūdro<sup>^</sup>api brāhmaṇo bhavati /**

シュードラ (śūdra:m.sg.nom) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) となる (bhavati)。

**ko hetuḥ /**

いかなる (kas:m.sg.nom) 理由 (hetu:m.sg.nom) でか?

**iha hi mānave dharme<sup>^</sup>abhihitam :**

なぜなら (hi)、これに関しては (iha)、『マヌ法典』において (mānave dharme)、  
[以下のように] 言われている (abhihita:nt.sg.nom) からである。

**araṇī-garbha-sambhūtaḥ kaṭho nāma mahā-muniḥ /**

**tapasā brāhmaṇo jātas tasmāj jātir akāraṇam //22//**

鑽木 (araṇī=araṇi) の母胎／胎児 [処] (garbha) より生じた (saṃbhūta:m.sg.nom)、カタ (kaṭha:m.sg.nom) という名前 (nāma:nt.sg.acc :adv) の偉大な (mahat:m.sg.nom) 牟尼 (muni:m.sg.nom) は、苦行 (tapas:nt.sg.instr) によってバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) として誕生した (jāta:m.sg.nom)。それ故に (tasmāt)、生まれジャーティ (jāti:f.sg.nom) は、[バラモンたることの] 原因ではない (akāraṇa:nt.sg.nom)。<22>

**kaivartī-garbha-sambhūto vyāso nāma mahā-muniḥ /**

**tapasā brāhmaṇo jātas tasmāj jātir akāraṇam //23//**

漁女 (kaivartī) の母胎／胎児 [処] (garbha) より生じた (saṃbhūta:m.sg.nom)、ヴィヤーサ (vyāsa:m.sg.nom) という名前 (nāma:nt.sg.acc:adv) の、偉大な (mahat:m.sg.nom) 牟尼 (muni:m.sg.nom) は、苦行 (tapas:nt.sg.instr) によってバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) として誕生した (jāta:m.sg.nom)。それ故に (tasmāt)、生まれジャーティ (jāti:f.sg.nom) は、[バラモンたることの] 原因ではない (akāraṇa:nt.sg.nom)。<23>

**urvaśī-garbha-sambhūto vasiṣṭho<sup>h</sup>api mahā-muniḥ /**

**tapasā brāhmaṇo jātas tasmāj jātir akāraṇam //24//**

**hariṇī-garbha-sambhūta ṛṣyaśṛṅgo mahā-muniḥ /**

**tapasā brāhmaṇo jātas tasmāj jātir akāraṇam //25//**

ウルヴァシー (urvaśī) の母胎／胎児 [処] (garbha) より生じた、偉大な牟尼 (mahā-muni:m.sg.nom)、ヴァシシュタ (vasiṣṭha:m.sg.nom) も (api)、苦行 (tapas:nt.sg.instr) によってバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) として誕生した (jāta:m.sg.nom)。それ故に (tasmāt)、誕生ジャーティ (jāti:f.sg.nom) が [バラモンたることの] 原因なのではない (akāraṇa:nt.sg.nom)。<24>

牝鹿 (hariṇī) の母胎／胎児 [処] (garbha) より生じた、偉大な牟尼 (mahāmuni:m.sg.nom)、リシュヤシュリング (ṛṣyaśṛṅga:m.sg.nom) は、苦行 (tapas:nt.sg.instr) によってバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) として誕生した (jāta:m.sg.nom)。それ故に、誕生ジャーティが [バラモンたることの] 原因なのではない。<25>

&lt;p.7&gt;

**caṇḍālī-garbha-sambhūto viśvāmitro mahā-muniḥ /****tapasā brāhmaṇo jātas tasmāj jātir akāraṇam //26//**

チャンダーラ女 (caṇḍālī) の母胎／胎児 [処] (garbha) より生じた (saṃbhūta:m.sg.nom)、偉大な牟尼 (mahāmuni:m.sg.nom)、ヴィシュヴァーミトラ (viśvāmitram.sg.nom) は、苦行 (tapas:nt.sg.instr) によってバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) として誕生した (jāta:m.sg.nom)。それ故に、誕生ジャーティが [バラモンたることの] 原因なのではない (akāraṇa:nt.sg.nom)。<26>

**tāṇḍulī-garbha-sambhūto nārado hi mahā-muniḥ /****tapasā brāhmaṇo jātas tasmāj jātir akāraṇam //27//**

米粒由来女 (tāṇḍulī) の母胎／胎児 [処] (garbha) より生じた (saṃbhūta:m.sg.nom)、偉大な牟尼 (mahāmuni:m.sg.nom)、ナーラダ (nārada:m.sg.nom) は、実に (hi)、苦行 (tapas:nt.sg.instr) によってバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) として誕生した (jāta:m.sg.nom)。それ故に、誕生ジャーティが [バラモンたることの] 原因なのではない (akāraṇa:nt.sg.nom)。<27>

**jīta-ātmā niṣpratidvandvaḥ pañca jītvā yata-indriyaḥ /****tapasā brāhmaṇo jāto brahmacaryeṇa brāhmaṇaḥ //28//**

勝利せる自己アートマン (jīta-ātman:m.sg.nom) を有し、敵を持たない／相対を離れ (niṣpratidvandva:m.sg.nom)、5 [大／所成の身体] を (pañca:m.pl.acc) 克服して (jītvā)、感官を制御した (yata-indriya:m.sg.nom) 者は、苦行 (tapas:nt.sg.instr) によってバラモン (brāhmaṇa:m.sg.nom) として誕生した (jāta:m.sg.nom)。[また、] 梵行 (brahmacarya) によって、バラモン (brāhmaṇa) として [誕生した。] <28>

**na ca te brāhmaṇī-putrās te ca lokasya brāhmaṇāḥ /****śīla-śauca-mayaṃ brahma tasmāt kulam akāraṇam //29//**

そして (ca)、かれらは (te:m.pl.nom)、バラモン女 (brāhmaṇī) の息子 (putra:m.pl.nom) であるということはない (na)、が (ca)、かれらは (te:m.pl.nom)、世間 (loka:m.sg.gen) にとっては、バラモン (brāhmaṇa:m.pl.nom) なのである。ブラフマン (brahman:nt.sg.nom) は、戒 (śīla)・清浄 (śauca) よりなる (mayant.sg.

nom)。それ故に (tasmāt)、クラ家柄 (kula:nt.sg.nom) が、[バラモンたることの] 原因なのではない (akāraṇa:nt.sg.nom)。<29>

**śīlaṃ pradhānaṃ na kulaṃ pradhānaṃ kulena kiṃ śīla-vivarjitena /  
bahavo narā nīca-kula-prasūtāḥ svargaṃ gatāḥ śīlaṃ upetya dhīrāḥ //30//**  
戒 (śīla:nt.sg.nom) が、主要で (pradhāna:nt.sg.nom) あって、家柄クラ (kula:nt.sg.nom) が主要で (pradhāna:nt.sg.nom) あるということはない (na)。戒 (śīla) を欠いている (vivarjita:nt.sg.instr)、家柄クラ (kula:nt.sg.instr) によって、なにごとかあらん (kim:nt.sg.nom)。多くの (bahu:m.pl.nom) 人 (nara:m.pl.nom) 々は、卑しい (nīca) 家柄クラ (kula) に生まれて (prasūta:m.pl.nom)、戒 (śīla:nt.sg.acc) を備えて (upetya:upa-i の絶対詞)、堅固に (dhīra:m.pl.nom) なり、天界 (svarga:m.sg.acc) に、到った (gata:m.pl.nom)。<30>

**[Z] ke punas te kaṭha-vyāsa-vaśiṣṭha-ṛṣyaśṛṅga-viśvāmitra-prabhṛtayo  
brahmarṣayo nīca-kula-prasūtās te ca lokasya brāhmaṇāḥ / tasmād asya  
vacanasya prāmāṇyād apy aniyato^ayaṃ brāhmaṇa-prasaṅga iti, śūdra-  
kulo^api brāhmaṇo bhavati /**

いわんや (ke punar)、彼等 (te)、カタ (kaṭha)・ヴィヤーサ (vyāsa)・ヴァシシユタ (vaśiṣṭha)・リシユヤシユリンガ (ṛṣyaśṛṅga)・ヴィシユヴァーミトラ (viśvāmitra) などの、梵仙 (brahmarṣi) たちは、卑しい (nīca) クラ家柄 (kula) に生まれて (prasūta)、しかも (ca) 彼等は (te)、世間 (loka) にとっては、バラモン (brāhmaṇa) なのである。それ故に (tasmāt)、この (asya)、言葉 (vacana :nt.sg.gen) に、量性 (prāmāṇya :nt.sg.abl) が存することに基づいても、この (ayaṃ)、「バラモン (brāhmaṇa)」[という言葉] の適用 (prasaṅga:m.sg.nom) は、必然的ではない (aniyata:m.sg.nom) ののである。したがって (iti)、シユードラのクラ家柄の者 (śūdra-kula) もまた (api)、バラモン (brāhmaṇa) となる (bhavati) ののである。

**[AA] kiṃ ca^apy anyad bhavadīya-mataṃ :  
mukhato brāhmaṇo jāto bāhubhyāṃ kṣatriyas tathā /  
ūrubhyāṃ vaiśyaḥ saṃjātaḥ pad[u?]bhyāṃ śūdraka eva ca //31//**

さらにまた、別の、あなたがたのものである見解がある。

バラモン (brāhmaṇa) は口／顔 (mukha) から誕生し (jāto)、同様に (tathā)、ク

シャトリヤ (kṣatriya) は、両腕 (bāhu) より [誕生し、] ヴァイシユヤ (vaiśya) は、両腿 (ūru) より、誕生した (saṃjāta)。そして (ca)、他ならぬ (eva) シュードラ (śūdra) は、両足 (pad) より [誕生した。]

<p.8>

**[BB] atra<sup>u</sup>cyate / brāhmaṇā bahavo, na jñāyante kuto mukhato jātā brāhmaṇā iti / iha hi kaivarta-rajaka-caṇḍāla-kuleṣv api brāhmaṇāḥ santi /**

**teṣāṃ api cūḍākaraṇa-muñja-daṇḍa-kāṣṭha-ādibhiḥ saṃskārāḥ kriyante / teṣāṃ api brāhmaṇa-saṃjñā kriyate /**

これに関して、言われる。バラモンは多数 [存在する。] 何故に、口より生じたバラモンたちが知られないのか？ と。実に (hi) この世においては (iha)、漁夫 (kaivarta)、染物師 (rajaka)、チャンダーラ (caṇḍāla) のクラ家柄 (kula) にも、バラモンたちは存在する (santi) のである。かれらにとってもまた、剃髪&髻 (cūḍā-karaṇa) ・ムンジャ草 (muñja) ・ダング (daṇḍa) ・カーシュタ木 (kāṣṭha) などによって、諸々の浄化式 (saṃskāra) が為されるのである (kriyante)。かれらに対しても、バラモン (brāhmaṇa) という名称 (saṃjñā) が為される (kriyate) のである。

**tasmād brāhmaṇavat kṣatriya-ādayo<sup>u</sup>api /**

**iti paśyāma eka-varṇo, na<sup>u</sup>asti cāturvarṇyam iti /**

それ故に、クシャトリヤなども、バラモンと同様である。

したがって (iti)、一つのヴァルナ (eka-varṇa) があるのであって、4 姓 (cāturvarṇya) は存在しない、とわれわれは考える (paśyāmaspaś- の P 1pl) のである。

**[CC] api ca / eka-puruṣa-utpannānām katham cāturvarṇyam /**

**iha kaś cid devadatta ekasyāṃ striyāṃ caturaH putrāṃ janayati /**

**na ca teṣāṃ varṇa-bhedo<sup>u</sup>asti / ayaṃ brāhmaṇo<sup>u</sup>ayaṃ kṣatriyo<sup>u</sup>ayaṃ vaiśyo<sup>u</sup>ayaṃ śūdra iti /**

**kasmād / eka-pitṛkatvād / evaṃ brāhmaṇa-ādīnām katham cāturvarṇyam /**

さらにまた (api ca)、一人の (eka) プルシャ (puruṣa: 原人) より生じた者 (utpanna) たちに、どうして (katham)、4 姓 (cāturvarṇya) があるだろうか？

この世界において (iha)、とある (kaś cid) デーヴァダッタ (devadatta) が、一人 (eka) の女性 (stri) において、4 人の (catur) 息子 (putra :m.pl.acc) を、生じる (janayati :jan- の使役 P 3sg) のである。だが (ca)、その [4 人の息子] たちに、

ヴァルナ (varṇa) の差別 (bheda) があるということはない (na) ののである。この者は (ayam) バラモン (brāhmaṇa) である、この者は (ayam) クシャトリヤ (kṣatriya) である、この者は (ayam) ヴァイシュヤ (vaiśya) であり、この者は (ayam)、シュードラ (śūdra) である。と (iti)。

何故か？ (kasmāt) 同一の (eka) 父親を持つもので (pitṛkatva) あるが故に。

[DD] iha hi go-hasty-aśva-mṛga-siṃha-vyāghra-ādīnām pada-viśeṣo dṛṣṭaḥ /  
 実に (hi) この世界においては (iha)、牛 (go) ・ 象 (hastin) ・ 馬 (aśva) ・ 鹿 (mṛga) ・  
 獅子 (mahā) などに、固有の足跡 (pada-viśeṣa) があることが知られている (dṛṣṭa)。  
 go-padam idam hasti-padam idam aśva-padam idam mṛga-padam idam  
 siṃha-padam idam vyāghra-padam idam iti / na ca brāhmaṇa-ādīnām  
 brāhmaṇa-padam idam kṣatriya-padam idam vaiśya-padam idam śūdra-  
 padam idam iti ataḥ pada-viśeṣa-abhāvād api paśyāma eka-varṇo, na<sup>^</sup>asti  
 cāturvarṇyam /

これは、牛 (go) の足跡 (pada) である、これは象 (hastin) の足跡である、これは、馬 (aśva) の足跡である、これは、鹿 (mṛga) の足跡である、これは、獅子 (siṃha) の足跡である、これは、虎 (vyāghra) の足跡である、と (iti)。しかるに (ca)、バラモン (brāhmaṇa) などに対して、これは (idam)、バラモン (brāhmaṇa) の足跡 (pada) である、これは、クシャトリヤの足跡である、これは、ヴァイシュヤの足跡である、これは、シュードラの足跡である、とは [知られていない。] この故に (atas)、固有の足跡 (pada-viśeṣa) がない (abhāva) ことから (api)、一つのヴァルナ (eka-varṇa) があるのであって、4 姓 (cāturvarṇya) は存在しない、[と] われわれは考える (paśyāmas:paś- の P 1pl) のである。

[EE] iha go-mahiṣa-aśva-kuñjara-khara-vānara-chāga-eḍaka-ādīnām bhaga-  
 liṅga-varṇa-saṃsthāna-mala-mūtra-gandha-dhvani-viśeṣo dṛṣṭaḥ / na tu  
 brāhmaṇa-kṣatriya-ādīnAm / ato<sup>^</sup>apy aviśeṣād eka eva varṇa iti /

この世にあっては (iha)、牛 (go) ・ 水牛 (mahiṣa) ・ 馬 (aśva) ・ 象 (kuñjara) ・ 驢馬 (khara) ・ 猿 (vānara) ・ 山羊 (chāga) ・ 羊 (eḍaka) などに対して、女性性器 (bhaga) ・ 男性性器 (liṅga) ・ 色 (varṇa) ・ 状態 (saṃsthāna) ・ 汚れ (mala) ・ 尿 (mūtra) ・ 臭い (gandha) ・ 音 (dhvani) の特殊性 (viśeṣa) が認められる (dṛṣṭa:m. sg.nom) のであって (tu)、バラモン (brāhmaṇa) ・ クシャトリヤ (kṣatriya) など

に対して、[女性性器・男性性器・色・状態・汚れ・尿・臭い・音の特殊性が認められる] というのではない (na) ののである。このことからまた (ato<sup>^</sup>api)、[バラモン・クシャトリヤなどが、] 特殊性がない (aviśeṣa) が故に、ヴァルナ (varṇa) は一つのみ (eka<sup>^</sup>eva) である、と (iti) [われわれは考えるのである。]

[FF] api ca / yathā haṃsa-pārāvata-śuka-kokila-śikhaṇḍi-prabhṛtīnām rūpa-varṇa-loma-tuṇḍa-viśeṣo dṛṣṭaḥ / na tathā brāhmaṇa-ādīnām / ato<sup>^</sup>apy aviśeṣād eka eva varṇa iti /

さらにまた (api ca)、ハンサ鳥 (haṃsa)・鳩 (pārāvata)・鸚鵡 (śuka)・コーキラ鳥 (kokila)・孔雀 (śikhaṇḍin) など (prabhṛti) に対して、形 (rūpa)・色 (varṇa)・毛 (loma)・嘴 (tuṇḍa) の特殊性 (viśeṣa) が、認められる (dṛṣṭa) のであって (tu)、バラモン (brāhmaṇa) などに対して、[形・色・毛・嘴の特殊性が、認められる] というのではない (na) ののである。このことからまた (ato<sup>^</sup>api)、[バラモンなどが、] 特殊性がない (aviśeṣa) が故に、ヴァルナ (varṇa) は一つのみ (eka<sup>^</sup>eva) である、と (iti) [われわれは考えるのである。]

[GG] yathā vaṭa-bakula-palāśa-aśoka-tamāla-nāgakesara-śirīṣa-campaka-prabhṛtīnām vṛkṣānām viśeṣo dṛśyate, yad uta daṇḍataś ca patrataś ca puṣpataś ca phalataś ca tvag-asthi-bīja-rasa-gandhataś ca, na tathā brāhmaṇa-kṣatriya-ṣūdrānām aṅga-pratyāṅga-viśeṣo na ca tvaṅ-māṃsa-śoṇita-asthi-śukra-mala-varṇa-saṃsthāna-viśeṣaṇam na<sup>^</sup>api prasava-viśeṣo dṛśyate / tato<sup>^</sup>apy aviśeṣād eka eva varṇo bhavati /

ヴァタ (vaṭa)・バクラ (bakula)・パラージャ (palāśa)・アショーク (aśoka)・タマーラ (tamāla)・ナーガケーサラ (nāgakesara)・シェリーシャ (śirīṣa)・チャンパカ (campaka) など (prabhṛti) の諸々の樹木 (vṛkṣa) に対して、特殊性 (viśeṣam.sg.nom) が認められる (dṛśyate)、すなわち (yad uta)、幹 (daṇḍataś)、葉 (patrataś)、花 (puṣpataś)、果実 (phalataś)、さらに樹皮 (tvak)・髄芯 (asthi)・種子 (bīja)・樹液 (rasa)・臭い (gandha) による (tas) [特殊性が、認められる] が、バラモン (brāhmaṇa)・クシャトリヤ (kṣatriya)・ヴァイシユヤ (viṣ)・シュードラ (śūdra) に対しては、肢体 (aṅga)・副肢体 (pratyāṅga) の特殊性 (viśeṣa.m.sg.nom) が、[認められるということは] ない (na) し、皮膚 (tvak)・肉 (māṃsa)・血 (śoṇita)・骨 (asthi)・精液 (śukra)・汚れ (mala)・色 (varṇa)・状態



(saṃsthāna) の特殊性 (viśeṣaṇa:nt.sg.nom) が、[認められることは] ない (na tathā) し、また (api)、出産 (prasava) の特殊性 (viśeṣa:m.sg.nom) が認められるということもない (na) ののである。そのことからまた (tato`api)、[バラモンなどが、] 特殊性がない (aviśeṣa) が故に、ヴァルナ (varṇa) は一つのみ (eka`eva) である、と (iti) [われわれは考えるのである。]

**[HH] api bho brāhmaṇa sukha-duḥkha-jīvita-buddhi-vyāpāra-vyavahāra-maraṇa-utpatti-bhaya-maithuna-upacāra-samatayā na`asty eva viśeṣo brāhmaṇa-ādīnām /**

また (api)、おお (bho)、バラモン (brāhmaṇa :m.sg.voc) よ！ 快 (sukha) ・ 苦 (duḥkha) ・ 生命 (jīvita) ・ 統覚機能 (buddhi) の働き (vyāpāra) ・ 言語的行為 (vyavahāra) ・ 死 (maraṇa) ・ 誕生 (utpatti) ・ 恐れ (bhaya) ・ 交接 (maithuna) ・ 習慣 (upacāra) は等しい (sama-tā:f.sg.instr) のであって、バラモン (brāhmaṇa) など (ādī) にとって、特殊性 (viśeṣa:m.sg.nom) は、決して存しない (na`asty eva) のである。

**[I I] idaṃ ca`avagamyatām / yathā`eka-vṛkṣa-utpannānām phalānām na`asti varṇa-bheda udumbara-pañasa-phalavad / udumbarasya hi pañasasya ca phalāni kāni cit śākhāto bhavanti kāni cid daṇḍataḥ kāni cit skandhataḥ kāni cin mūlataḥ / na ca teṣām bhedo`asti`idaṃ brāhmaṇa-phalam idaṃ kṣatriya-phalam idaṃ vaiśya-phalam idaṃ śūdra-phalam iti / eka-vṛkṣa-utpannatvād / evaṃ narāṇām api na`asti bhedaḥ / eka-puruṣa-utpannatvād /**

そして (ca)、以下のこと (idaṃ) が了解されるべき (avagamyatām :ava-gam- の命令 A 3sg) である。すなわち、ウドウンバラ (udumbara) ・ パナサ (pañasa) の果実 (phala) のように、同一の (eka) 樹木 (vṛkṣa) より生じた (utpanna) 諸々の果実 (phala) には、色の別異性 (varṇa-bheda) は存しない (na`asti) のである。

なぜならば (hi)、ウドウンバラ (udumbara) とパナサ (pañasa) の果実 (phala) のうちの、あるものは、枝 (śākhā) から生じ (bhavanti)、あるものは、幹 (daṇḍa) から [生じ]、[また] あるものは、樹幹 (skandha) から、あるものは、根 (mūla) から [生じるのである。] そして (ca)、それら [果実] たちに (teṣām)、別異性 (bheda:m.sg.nom) が存する (asti) ということはない (na) のである。これはバラモンの果実 (brāhmaṇa-phala) である、これはクシャトリヤの果実

(kṣatriya-phala)である、これはヴァイシュヤの果実(vaiśya-phala)である、これはシュードラの果実(sūdra-phala)である、といった(iti)。「それら果実たちが、」同一の(eka)樹木(vṛkṣa)から生じたもの(utpanna)であるが故に。そのように(evam)、人間(nara :m.pl.gen)たちにも(api)、別異性(bheda:m.sg.nom)が存するということはない(na`asti)のである。同一の(eka)原人プルシャ(puruṣa)から生じたもの(utpanna)であるが故に。

**[JJ] anyac ca dūṣaṇam bhavati / yadi mukhato jāto bhavati brāhmaṇo brāhmaṇyāḥ kuta utpattiḥ / mukhād eva`iti ced / hanta tarhi bhavatām bhaginī-prasaṅgaḥ syāt / tathā gamya-agamyam na sambhāvyaḥ / tac ca loke`atyanta-viruddham / tasmād aniyataṁ brāhmaṇyam /**

また(ca)、別の(anya:nt.sg.nom)論難(dūṣaṇa:nt.sg.nom)が存する(bhavati)。もし(yadi)バラモン(brāhmaṇa:m.sg.nom)が、口／顔(mukha)から生じた(jāto)のである(bhavati)ならば、バラモン女(brāhmaṇī:f.pl.gen)たちの生起(utpatti:f.sg.nom)は、どこから(kutas)であろうか？ 仮に(cet)、同じ(eva)口／顔(mukha)から[生じた]と[言うのである]ならば、その時には(tarhi)、哀れむべし(hanta)！「それらバラモン女たちは」あなた(bhava:m.pl.gen)がたの、姉妹(bhaginī)ということになる(prasaṅga:m.sg.nom)であろう(syāt)。その結果(tathā)[交接の]妥当性(gamya)・非妥当性(agamya:nt.sg.nom)は、[確定が]不可能になる(na sambhāvyaḥ)のである。そして(ca)、そのこと(tat:nt.sg.nom)は、世間(loka:m.sg.loc)において、絶対的にあってはならないこと／矛盾(atyanta-viruddha:nt.sg.nom)である。

**[KK] kriyā-viśeṣeṇa khalu catur-varṇa-vyavasthā kriyate / tathā ca yudhiṣṭhira-adhyeṣitena vaiśampāyana`abhīhitam kriyā-viśeṣataś cāturvarṇyam iti :**

実に(khalu)、行為(kriyā)の特殊性(viśeṣa :m.sg.instr)によって、4姓(catur-varṇa)の決定(vyavasthā:f.sg.nom)がなされる(kriyate)のである。また(ca)、同様に(tathā)、ユディシテイラ(yudhiṣṭhira)に問われた(adhyeṣita :m.sg.instr)、ヴァイシャンパーヤナ(vaiśampāyana:m.sg.instr)によって、行為(kriyā)の特殊性(viśeṣa)に基づいて、4姓制度(cāturvarṇya:nt.sg.nom)があると、言われている(abhīhita:nt.sg.nom)のである。

pāṇḍos tu viśrutaḥ putraḥ sa vai nāmnā yudhiṣṭhiraḥ /  
vaiśampāyanam āgamyā prāñjaliḥ paripṛcchati //32//

「しかるに (tu)、パーンドウ (pāṇḍu) の、かの (sa) 有名な (viśruta)、ユディシテイラ (yudhiṣṭhira) という名前の (nāmnā)、息子 (putra) は、ヴァイシヤンパーヤナ (Vaiśampāyana) の元に、来た後に (āgamyā)、合掌して (prāñjali)、尋ねました (paripṛcchati)。<32>

ke ca te brāhmaṇāḥ proktāḥ kiṃ vā brāhmaṇa-lakṣaṇam /  
etad icchāmi bho jñātuṃ tad bhavān vyākaroṭu me //33//

『して (ca)、バラモン (brāhmaṇa) と言われる (prokta) それらの方々とはいかなる者でしょうか？あるいは、バラモンの特徴／定義 (lakṣaṇa) とはいかなるものでしょうか？ [わたしは] それを、知りたく思います、あなたよ。あなた様は、わたしに、それを、説明なさるべし (vyākaroṭu)』 <33>

vaiśampāyana uvāca :

kṣānti-ādibhir guṇair yuktas tyakta-daṇḍo nirāmiṣaḥ /  
na hanti sarva-bhūtāni prathamam brahma-lakṣaṇam //34//

ヴァイシヤンパーヤナが語った。『忍耐 (kṣānti) などの諸美德 (guṇa) を具足し、錫杖を捨て、肉欲がなく、一切生類 (sarvabhūta) を害さない (na hanti) こと、[それが] 第一の、バラモンの特徴である。<34>

<p.10>

yadā sarvaṃ para-dravyaṃ pathi vā yadi vā gr̥he /  
adattaṃ na<sup>eva</sup> gr̥hṇāti dvitīyaṃ brahma-lakṣaṇam //35//

もし、路上、ないし家中の、一切の、他者の財物は、与えられなかったならば、[その者は] 取ることを決してしない。[それが] 第二のバラモンの特徴である。<35>

tyaktvā krūra-svabhāvaṃ tu nirmamo niṣparigrahaḥ /  
muktaś carati yo nityaṃ tṛtīyaṃ brahma-lakṣaṇam //36//

その者が、残忍な自性を捨てて、無私にして、無取にして、常に、解脱した状態で行じる、[それが] 第三のバラモンの特徴である。<36>

deva-mānuṣa-nārīṇāṃ tiryagyoni-gateṣv api /

**maithunaṃ hi sadā tyaktaṃ caturthaṃ brahma-lakṣaṇam //37//**

[かれらが] 仮に畜生胎に到っても、神・人間の女たちとの他ならぬ交接は、常に棄却されてある、[それが] 第四の、バラモンの特徴である。<37>

**satyaṃ śaucaṃ dayā śaucaṃ śaucaṃ indriya-nigrahaḥ /**

**sarva-bhūta-dayā śaucaṃ tapaḥ śaucaṃ ca pañcamam //38//**

真実 (satya:nt) という清浄 (śauca)、憐憫 (dayā:f) という清浄、感官の調伏 (indriya-nigraha:m) という清浄、一切の生類 (sarva-bhūta) に対する憐憫 (dayA) という清浄、そして苦行 (tapas :nt) という清浄、[それが] 第五の、[バラモンの特徴] である。<38>

**pañca-lakṣaṇa-sampanna īdrśo yo bhaved dvijaḥ /**

**tam ahaṃ brāhmaṇaṃ brūyāṃ śeṣāḥ sūdrā yudhiṣṭhira //39//**

その、再生族者 (dvija) が、このような (īdrśa)、五つの特徴を具足する (sampanna) ようならば、その者を、わたしは、バラモン (brāhmaṇa) と言うのである。残余の者 (śeṣa) たちはシュードラ (sūdra) である、ユディシティラよ。<39>

**na kulena na jātyā vā kriyābhir brāhmaṇo bhavet /**

**caṇḍālo^api hi vṛtta-stho brāhmaṇaḥ sa yudhiṣṭhira //40//**

家柄 (kula) や、生まれ (jāti) によって [バラモンなのでは] ない、諸行為 (kriyā) によってバラモン (brāhmaṇa) となるのである。なぜならば (hi)、チャンドーラ (caṇḍāla) であろうとも (api)、徳行に住する (vṛtta-stha) [ならば、] その者はバラモン (brāhmaṇa) であるのだから、ユディシティラよ。』<40>

**kiṃ ca bhūyo vaiśampāyanena^uktam :**

**eka-varṇam idaṃ pūrvaṃ viśvam āsīd yudhiṣṭhira /**

**karma-kriyā-viśeṣaṇa cāturvarṇyaṃ pratiṣṭhitam //41//**

さらにまた (kiṃ ca)、再度 (bhūyas) ヴァイシヤンパーヤナによって述べられた。『以前 (pūrvaṃ)、この一切 (viśva) は、一つの種姓 (eka-varṇa) よりなっていた、ユディシティラよ。行為作業の特殊性 (karma-kriyā-viśeṣa) (= 特定の行為作業) によって、4 姓 (cāturvarṇya) が確立した (pratiṣṭhita) ののである。<41>

**sarve vai yoni-jā martyāḥ sarve mūtra-purīṣiṇaḥ /**

**eka-indriya-indriya-arthās ca tasmāc chīla-guṇair dvijāḥ //42//**

実に (vai) 一切は、母胎より生じた者 (yoni-ja) であり、死すべき者 (martya) である、一切は尿・糞を持てる者 (mūtra-purīṣin) であり、そして、同一の感官・感官の対象 (eka-indriya-indriya-artha) を持てる者である、それ故に、諸々の戒 (śīla)・美德 (guṇa) によって、再生族者 (dvija) なのである。<42>

**śūdro<sup>^</sup>api śīla-sampanno guṇavān brāhmaṇo bhavet /**

**brāhmaṇo<sup>^</sup>api kriyā-hīnaḥ śūdrāt pratyavaro bhavet //43//**

シュードラ (śūdra) であっても (api)、戒を具足し (śīla-sampanna)、美德を持っている (guṇavat) ならば、バラモン (brāhmaṇa) であろう。バラモン (brāhmaṇa) であっても、[善い] 行為を欠いている (kriyā-hīna) ならば、シュードラ (śūdra) よりも、劣った者 (pratyavara) となろう。』<43>

<p.11>

**idaṃ ca vaiśampāyana-vākyaṃ :**

**pañca-indriya-arṇavaṃ ghoram yadi śūdro<sup>^</sup>api tīrṇavān /**

**tasmai dānam pradātavyam aprameyaṃ yudhiṣṭhira //44//**

また、以下のヴァイシャンプアーヤナの言葉がある。

『シュードラ (śūdra) であろうとも (api)、[その者が、] もし (yadi)、恐ろしい (ghora)、五つの感官 (pañca-indriya) の海 (arṇava) を渡った (tīrṇavat:tī- 過去能動分詞 m.sg.nom) ならば、その者には、無量の (aprameya) 報施／布施 (dāna) が与えられるべき (pradātavya) である、ユディシテイラよ。<44>

**na jātir dṛśyate rājan guṇāḥ kalyāṇa-kāraḥ /**

**jīvitaṃ yasya dharma-arthe para-arthe yasya jīvitam /**

**aho-rātraṃ caret kṣāntiṃ taṃ devā brāhmaṇaṃ viduḥ //45//**

王よ、善 (kalyāṇa) を産み出すもの (kāra:m.pl.nom) は、諸々の美德 (guṇa:m.pl.nom) であって、ジャーティ生まれ (jāti:f.sg.nom) ではない (na)、ということが、知られている (dṛśyate:dṛś- の受動 A 3sg)。その者に、ダルマという目的 (dharma-artha) に関して生命 (jīvita) があり、他者という目的 (para-artha) に関して生命がある、[その者が、] おお、昼に夜に (ahorātram)、忍辱 (kṣānti) を

行じる (caret:car- の願望) ならば、神 (deva) 々は、その者を、バラモン (brāhmaṇa) であると知る (vidus:vid-)。<45>

**parityajya gr̥ha-āvāsaṃ ye sthitā mokṣa-kāṅkṣiṇaḥ /**

**kāmeṣv asaktāḥ kaunteya brāhmaṇās te yudhiṣṭhira //46//**

家に於ける居住 (gr̥ha-āvāsa) を捨てて (parityajya)、解脱への希求を持って (mokṣa-kāṅkṣin)、住し (sthita)、諸々の愛欲 (kāma) に、執着しない (asakta)、その者たちは、クンティの息子よ (kaunteya)、バラモン (brāhmaṇa) である、ユディシテイラよ。<46>

**ahiṃsā nirmamatvaṃ ca amata-kṛtyasya varjanam /**

**rāga-dveṣa-nivṛttiś ca etad brāhmaṇa-lakṣaṇam //47//**

不害 (ahiṃsā)、無私有 (nirmamatva)、及び為されるべきとは考えられていない (amata-kṛtya) ことを避けること (varjana)、そして貪欲 (rāga) と羨望 (dveṣa) の停止 (nivṛtti)、それが、バラモン (brāhmaṇa) の特徴 (lakṣaṇa) である。<47>

**kṣamā dayā damo dānaṃ satyaṃ śaucaṃ smṛtir ghr̥ṇā /**

**vidyā vijñānam āstikyam etad brāhmaṇa-lakṣaṇam //48//**

忍耐 (kṣamā)、憐憫 (dayā)、自制 (dama)、布施 (dāna)、真実 (satya)、清浄 (śauca)、憶念 (smṛti)、同情 (ghr̥ṇā)、明知 (vidyā)、知識 (vijñāna)、信仰 (āstikya)、それが、バラモン (brāhmaṇa) の特徴 (lakṣaṇa) である。<48>

**gāyatrī-mātra-sāro api varam vipraḥ suyantritaḥ /**

**na ayantritaś catur-vedī sarva-aśī sarva-vikrayī //49//**

ガーヤトリーのみを行じる者 (gāyatrī-mātra-sāra) であっても (api)、よく制御された者 (suyantrita) は、むしろ (varam) バラモン (vipra) である。4 ヴェーダを奉じる者 (catur-vedin) が、制御されず (ayantrita)、一切を食し (sarva-aśin)、一切を商う者 (sarva-krayin) であるならば、[バラモンであることは] ない (na)。<49>

**eka-rātra-uṣitasya api yā gatiḥ brahmacāriṇaḥ /**

**na tat kratu-sahasreṇa prāpnuvanti yudhiṣṭhira //50//**

一夜の住者(eka-rātra-uṣita)であろうとも (api)、梵行者 (brahmacārin) には、ある帰趨 (gatīf.sg.nom) があるが、そこには (tat:nt.sg.acc)、[人々が] 1000 の祭祀 (kratu-sahasra) によって、到達する (prāpnuvanti) というのではない (na)、ユディシテイラよ。<50>

**pāragam sarva-vedānām sarva-tīrtha-abhiṣecanam /  
muktaś carati yo dharmaṃ tam eva brāhmaṇaṃ viduḥ //51//**

一切のヴェーダ (sarva-veda) の彼岸への到達 (pāraga)、一切の霊場 (sarvatīrtha) に於ける浄化 (abhiṣecana) を [果たして]、解脱し (mukta)、ダルマ (dharma) を行じる (carati)、他ならぬ (eva) その者を、[神々は?] バラモン (brāhmaṇa) と知る (vidus)。<51>

**yadā na kurute pāpaṃ sarva-bhūteṣu dāruṇam /  
kāyena manasā vācā brahma sampadyate tadā // iti //52//**

一切の生類 (sarva-bhūta) に対して、恐ろしい (dāruṇa) 悪 (pāpa) を、身体 (kāya) によって、心 (manas) によって、言葉 (vāc) によって、為す (kurute) ことがない (na)、その時に (yadā tadā)、[その者は] ブラフマン (brahman) に、到達する (saṃpadyate)。<52>

**asmābhir uktaṃ yad idaṃ dvijānām mohaṃ nihantuṃ hata-buddhikānām /  
gr̥hṇantu santo yadi yuktam etan muñcantv atha^ayuktam idaṃ yadi syāt //53//**

他ならぬ以上のことが、知性の損なわれた (hata-buddhi)、再生族者 (dvija) たちの、迷妄 (moha) を、打破すべく (nihantum)、われわれによって (asmābhis) 述べられた (ukta) が、善人 (sat) たちは、もし (yadi)、そのことが正しい (yukta) ならば、嘉納すべし (gr̥hṇantu:grah-)、もし (yadi)、正しくない (ayukta) ならば、破棄すべし (muñcantu:muc-)。<53>

**kṛtir iyaṃ siddha-ācārya-aśvagoṣa-pādānām iti // śubham //**

これは、成就者 (siddha) にして師 (ācārya) たる尊き (pāda) アシユヴァゴーシャの、作物 (kṛti) である。めでたし! (śubha)